

聖書：Ⅱペテロ 1：19～21

説教題：暗い所を照らすともしび

日時：2018年2月25日（朝拝）

この手紙は本論が1章16節から始まっていますが、その16節にありましたように、ペテロは「主イエス・キリストの力と来臨」について語っています。なぜこれを取り上げているかと言うと、偽教師たちがこの教えを否定していたからでした。3章4節：「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。父祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」そしてこの再臨の否定と結び付いていたのが不道徳な生活でした。最後のさばきはないと思えば、そういうことになるでしょう。そこでペテロは読者たちが聞いて来た教えであるとは言え、その真理をもう一度思い起こさせ、彼らを奮い立たせようとしてこの手紙を書いています。

前回の16～18節では、キリストの再臨が確かにあることの根拠として、キリストが高い山で栄光の御姿に変貌された時のことについて語りました。マタイ、マルコ、ルカのどの福音書でもそうでしたが、イエス様が再臨の予告をされた直後に、その栄光の御姿に変わった時の記事が記されていました。すなわちあの高い山での変貌の記事は、やがて起る再臨の前触れとしての意味を持っているということでした。ペテロは、私たちはそのキリストの威光を目撃した！と語っています。イエス様は1回目のご自分を無にして貧しい姿で来られましたが、2回目はあの時のお姿が指し示す栄光に輝く状態で来られる。これに続いてペテロは今日の19～21節でもう一つのことを述べます。それは預言のみことばということでした。

19節に「また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています」とあります。ここで特に考えられているのは、やがてキリストが王として世界を治めることに関する預言でしょう。まずここで少し気になるのは、この預言について「さらに確かな」と言われていることではないでしょうか。これは先に述べたペテロの証しよりも確かということでしょうか。つまりペテロのあかしはより不確かということでしょうか。それは不自然だと思えます。ペテロは前回あれだけ、「私たちは見たのです！」と力強く証しをしたのに、それをいくらかでもあやふやなものとして語るなら、先の言葉は一体何だったのかということになってしまいます。この19節には米印がついて欄外の19を見ると、別訳として「こうして私たちには預言のことばがいつそう確実なものとしたの

です」とあります。そしてこちらの解釈を取る学者の方が多いようです。旧約の預言はもちろんそのままでも十分に確かなものですが、前回ペテロは主が高い山で栄光の姿に変貌された様子について述べました。これは旧約聖書が指し示す、やがての王メシヤの栄光の状態の前触れであり、その部分的な成就です。そのことによって旧約の預言が、これを聞く者たちにとって一層確かなものになったということです。ですから比べられているのはペテロのあかしと旧約の預言ではなく、主の変貌がなされる以前に読む場合の旧約の預言と、その後読む場合の旧約の預言です。あるいはある学者たちは、ここでは言語的には「さらに確かな」という比較級の言葉が使われているが、新約聖書で使われているコイナーというギリシャ語では最上級の意味を持っていたと言います。そうだとすると、ここには何かと何かを比べる意図は特になく、ただ聖書の預言が「とても確かである」と強調しているだけということになります。その非常に確かな預言の言葉を、ペテロのあかしに加えているということになります。

さてペテロはこの預言の言葉に目を留めているといいと言います。すなわちこれにしっかりと心を留めていなさい！と言います。この勧めを見て行くにあたって、いくつか興味深い表現があります。まずこの預言のみことばのことが「暗い所を照らすともしび」と言われています。「暗い所」とはこの世を指していると思われまふ。確かに一度キリストが来られて決定的なみわざを成し遂げ、そのキリストを知った私たちは心に光を頂きましたが、そうであってもこの世はまだ暗い所と言えまふ。多くの闇がまだあります。罪の闇があり、困難があり、戦いがあります。そんな暗いこの世を歩む上で、預言の御言葉は「ともしび」だと言われています。詩篇 119 篇 105 節：「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」 やみの中にともしびが一つあれば、それは私たちの行く道を照らしてくれます。私たちの心に希望と勇気を与えまふ。暗い中でも歩みを進めることができます。

その歩みはいつまでのものでしょうか。ここに「夜明けとなって、明けの明星が上るまでは」とあります。「夜明け」とは今の暗やみが明ける時のこと、すなわち主が再臨される時のことです。やみが追い払われ、神の正義の光が勝利し、支配する日のことです。明けの明星とは何でしょう。これは夜が明ける時にそこに輝く星のこと。朝明けのしるしとなるもの。ここではイエス様ご自身を指していると考えられまふ。黙示録 22 章 16 節：「わたしはダビデの根、また子孫、輝く明けの明星である。」

その明けの明星が「心の中に上るまで」とあります。ある人は、主の再臨は現実の世界で目に見える形で起こるはずではないのか。心の中に上るといふ単なる内面的な経験ではないのではないかと言うかもしれません。もちろんその通り、キリストの再臨は現実の世界で目に見える形で行なわれると聖書に述べられています。しかしここでは主の再臨が信者たちの心に与える素晴らしい影響のことを語っているのだと思われます。その日が来るまではクリスチャンの心には、信じているとは言え、疑いや不確かさがいくらか残っているかもしれません。しかし再臨の日にはそういったものが消え去るのです。明けの明星なる方の光がはっきり差し込むのです。I コリント 13 章 12 節：「そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。」 その日には私たちの不完全な状態は完全に取って代わります。その完全な喜びが心の中に満ちる日までと言われているのです。

さて、その日まで目を留めているべき預言のみことばについて、ペテロは私たちがわきまえ知るべきことについて 20～21 節でコメントします。聖書とはどういうものであるか、に関する真理です。しかしここも解釈が少し難しいところです。新改訳で 20 節はこう訳されています。「それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。」 こうだとすると、これは聖書の読み方についての注意ということになります。自分勝手な読み方をしてはならない。独り善がりな読み方をしてはいけません。よく歴史的・文法的解釈と言われますが、その書が書かれた歴史的な背景や文脈を良く考慮し、また当時使われた言語の文法に基づいて、まずは客観的に理解することに努めるということです。しばしば「聖書は聖書によって解釈する」、つまり聖書のある言葉は聖書の他の言葉との関係やバランスの中で理解すると言われますが、これも私的解釈を避けるための重要な原則と言えると思います。しかしこの 20 節には、これと違った訳し方があります。新改訳第 3 版には付いていませんが、新改訳 2017 には新たに印が付いていて、欄外に次の別訳が記されています。すなわち「聖書のどんな預言も、預言者自身の解釈ではないことを、まず心得ておきなさい」と。結論から言えば、こちらの訳の方が適切であると思われます。原文には「～自身の解釈」とあるだけで、それは「読む人の解釈」なのか、それとも「預言者自身の解釈」なのか、はっきりしません。また「施してはいけません」という訳は、細かい説明は省略しますが、かなりの意識です。そして何よりも文脈に注意したいと思います。ペテロは 19 節で、聖書に目を留めていると良いと言って、20 節でその聖書について「私的解釈はダメよ」と注意しようとしたのでしょうか。絶対

にあり得ないとは言いませんが、もう一つの訳の方が断然すっきりします。すなわち 19 節で、聖書に目を留めていると良いと言った後に、20 節でペテロはその聖書について、それは預言者自身の解釈から出たものではないと言っている。すなわち人間に由来する、人間から出た言葉ではない。ではそれはどこから来たものなのか。それが 21 節で述べられていると考えられます。すなわち聖書は人間の意思によってもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人々が神からの言葉を語ったものであると。それは人間の知恵や洞察力を結集したものではなく、聖霊が動かして語らせたものである。すなわち聖書は神の靈感によるということがここで述べられているのです。

ここの「動かした」という言葉について注解者たちがコメントするのは、使徒の働き 27 章の出来事です。パウロたちが乗った船がユーラクロンという暴風に吹かれ、2 週間以上もアドリヤ海を漂流しました。あの時、人々は船具を捨て、積み荷を捨て、「流されるままにした」と記されています。その「流れるに任せた」という言葉が、ここの「聖霊に動かされた」という言葉と同じです。船が自分の力によってではなく、風の吹くままに運ばれたように、預言者たちは言わば聖霊の風に運ばれるようにして神の言葉を語った。しかし人間はただロボットのような機械的な道具として使われたのではありません。聖霊はそれぞれの人格を用いながら語らせました。ですから一人一人の個性や特徴、語彙、文体などはそれぞれのものであります。原語で聖書を読める人なら、例えば新約聖書で言えば、これはペテロらしい言葉使いだとか、ヨハネらしい文体だとか、パウロらしい言い方だというものがあります。にもかかわらず聖霊が誤りのない形で彼らに神からの言葉を語らせた。そういう意味で聖書は神に起源を持つ神の言葉です。これぞ聖書の独特性です。他の本と一線を画すことです。同じ書店に並んでいてもその本質は全く別物。他のすべては人間の言葉ですが、聖書は神が下さったことば。そのことを思っ何よりもこの聖書にこそ注目し、これに心を留めて歩め！とペテロは言っているのです。

果たして私たちはこの神の言葉である聖書に良く目を留めて歩んでいるでしょうか。私たちは保守的な教会に属する者として、「聖書は誤りなき神の言葉である」と教えられ、そのように告白していますが、実生活において本当にそのような神の言葉として特別な思いをもって見つめ、これに導かれる生活をしているでしょうか。このペテロのメッセージに即して言えば、私たちはこの聖書に目を注ぎ、導かれることを通して、いよいよ主の再臨を待ち望む生活をしているでしょうか。キリストが栄光の王として地上に再び来られて、神の支配を確立される救いの日を喜び見つめ、希望をかき立てられて歩

んでいるでしょうか。ペテロは聖書は「暗い所を照らすともしび」だと言いました。私たちの毎日の生活には今なお様々な暗さがあります。いただいた救いはどこへ行ったのか、それは本当なのか、とさえ思えるような苦しみ、戦い、悩みがあります。そんな私たちはどうしたら良いのでしょうか。ここに暗いやみを照らすともしびがあります。これこそ、私たちが今置かれている所で私たちがどう歩めば良いか、光を与えてくれるものです。聖書を読み、この御言葉に聞く時に、私たちは私たちの行くべき道を照らすともしびを頂きます。たとえどんなに今、自分が置かれている場所が暗くても、聖書のメッセージによれば、聖書の神がこの世界で働いてくださっている。罪のために悲惨と苦しみに陥っている私たちを見捨てず、大切な御子を遣わし、私たちの罪に打ち勝つ偉大なみわざを成し遂げてくださった。そして御子は今、復活して天の最も高き所に上られ、神のご計画をすべて成就した後、最も良い時に私たちの救い主として、また永遠の御国の王としてこの世に来られる。そして私たちが神の正義が住む新しい天と新しい地に住まわせてくださる。この預言の言葉に聞く時、私たちはどんな暗い所にいても、大いなる希望を与えられます。光を与えて頂くことができます。そして明けの明星が心の中に上る最後の日までの歩みを導いていただくことができます。このことを受け止めて私たちはこの世にあるどんな人間の声よりも、どんな流行りの言葉よりも、どんな偽教師たちの魅力的な言葉よりも、この確かな神のことばにこそ目を留め、第一の耳を傾けたいと思います。この神の言葉は私たちの日々の生活における私の足を照らすともしび、私の道の光です。この聖書によって心奮い立たされて主の再臨の日を目ざす歩みが続けたいと思いますし、その希望に導かれて、5～7節で見たような徳を増し加えて行く歩みへ進み、11節で見たように私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御国に入る恵みを豊かに加えられる歩みへ導かれて行きたいと思います。